

2020. 11. 8 (日) 創世記14:17~23

14:17 アブラムが、ケドルラオメルと彼に味方する王たちを打ち破って戻って来たとき、ソドムの王は、シャベの谷すなわち王の谷まで、彼を迎えに出て来た。

14:18 また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

14:19 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。

14:20 いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手に渡された方に。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。

14:21 ソドムの王はアブラムに言った。「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」

14:22 アブラムはソドムの王に言った。「私は、いと高き神、天と地を造られた方、主に誓う。

14:23 糸一本、履き物のひも一本さえ、私はあなたの所有物から何一つ取らない。それは、『アブラムを富ませたのは、この私だ』とあなたが言わないようにするためだ。

#### <説教>

ミント、イノンド、クミンといった植物からも几帳面に十分の一を献げていたパリサイ人や律法学者たちに対して、イエスは「律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。」と言われ、「これこそしなければならないことだ。」と言われました。(マタイ 23:23)

ミント、イノンド、クミンに限らず、彼らの「十分の一」のささげ物は、神の限りない「正義とあわれみと誠実」に感謝して心から喜んでしてるものではありませんでした。

そうでなく、ただただ自分の義を立てるため、自分の正しさ立派さを人に見せるために十分の一を献げていただけでした。

その偽善のゆえに「わざわいだ」とイエスは言われました。

「十分の一」を献げる以前の問題として、神の限りない義と愛と真実を覚え、確認して、神を愛し、神を畏れ、神に感謝して自分自身を神に献げること、「これこそしなければならないこと」だとイエスは言われるのでした。

そのうえで、「しかし、それら十分の一もおろそかにしてはいけない」、つまり見捨ててはいけない、し残してはいけない、放置したままにしてはいけない、放っておいてはいけないと言われたのです。

すなわち、イエス・キリストによって示され、注がれている神の限りない義と愛と真実を覚え、確認して、神を愛し、神を畏れ、神に感謝して自分自身を神に献げ、その信仰の具体的な告白として十分の一のささげ物を神の御前に忠実に誠実にするようにイエスは仰ったのです。

限りなく正しく、恵み深くあわれみ深く、愛である神への信仰、感謝と喜びをもって献げるのが神の民イスラエルの「十分の一」の本来の姿でした。

しかしそれが当時の律法学者やパリサイ人によって、形だけで信仰、感謝、喜び、誠実

といった中味のないもの、いわば死んだものとされていました。

イエスは「十分の一」のささげ物に先立って必要な信仰、「正義、あわれみ、誠実」、神への愛、心からの感謝と喜びを明らかになさいました。

そうやってイエスは死んでいた「十分の一」のささげ物をよみがえらせたのです。

そういう生きた「十分の一」のささげ物を最初にした人として聖書に記されているのが、アブラハム（当時はアブラム）です。

「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」  
(創世記 12:1-3)

この主なる神のみことばを信じてアブラムは「妻のサライと甥のロト、また自分たちが蓄えたすべての財産と、ハランで得た人たちを伴って」ハランを出、カナンの地に入りました。

神はアブラムの子孫にその地を与えると約束してくださいました。

しかしその地で飢饉が起こったためアブラムはエジプトに下りました。

アブラムはエジプトでは妻サライを妹だと言い、それで「羊の群れ、牛の群れ、ろば、それに男奴隷と女奴隷、雌ろば、らくだを所有するようにな」りました。

しかしサライが妻であることがファラオに知られてしまい、アブラムはサライ、ロトそして非常に多くの家畜と銀と金など所有するすべてのものを持ってエジプトを出て再びカナンの地に戻りました。

余りに多くの所有物のためにそこでは甥のロトと一緒に住めなくなり、アブラムはロトと別れて住むことになりました。

ロトはよく潤ったヨルダンの低地、死海のほとりソドムに移り、アブラムはカナンの地に住むようになりました。

神は再びその地をアブラムと彼の子孫に与えること、子孫を地のちりのように増やしてくださいませることを約束してくださいました。(ここまでが 13 章)

しかしそこで事が起こります (14 章)。

ロトが住んでいたソドムの王を始めとする死海周辺の国の 5 人の王が、彼らを 12 年間支配していたエラムの王ケドルラオメルに反逆しました。

こうしてケドルラオメルと彼に味方する王たち (計 4 人) の連合軍とソドムの王を始めとする 5 人の王の連合軍が闘うことになりました。

結果、ソドムの王たちは敗北して逃げ、ケドルラオメル軍が勝ち、彼らは「ソドムとゴモラのすべての財産とすべての食糧を奪って行」き、「アブラムの甥のロトとその財産も奪って行った」のでした。

ロトたちが捕虜になったことを聞いたアブラムは 380 人のしもべたちを連れてケドルラオメル軍を追いかけ、彼らを攻め、ついに彼らを打ち破ってしまいました。

「そして、アブラムはすべての財産を取り戻し、親類のロトとその財産、それに女たちやほかの人々も取り戻した」(14:16)のです。

このようにして、ソドムの王とその仲間の軍が勝てなかったケドルラオメルの大軍にた

った 381 人で挑んで追跡し、攻め、打ち破り、自分の親類ロトとその財産をも取り戻したアブラムをソドムの王が出迎えました。(14:17)

このとき、カナンの地「サレムの王」また「いと高き神の祭司」である「メルキゼデク」が「パンとぶどう酒を持って来」て「アブラムを祝福」したのです。

**14:19** 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。

**14:20** いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手に渡された方に。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。

ハランを出てカナンの地に入ったときに既にアブラムには「蓄えた財産」がありました(12:5)。

更にエジプトで「羊の群れ、牛の群れ、ろば、それに男奴隷と女奴隷、雌ろば、らくだを所有するようになっ」ていました(12:16)。

こうして「アブラムは家畜と銀と金を非常に豊かに持ってい」ました(13:2)。

「所有するものが多すぎ」(13:6)るほど持っていたのです。

それらの「すべての物の十分の一」ですからそれはそれは莫大な量だったでしょう。

アブラムは他人から言われたからではなく、誰かから命令されたからではなく、自分から進んでメルキゼデクに「すべての物の十分の一」を与えたのでした。

もちろん、ここで「いと高き神の祭司」に与えたのですから、神に献げたことになりま

す(人が神に「与える」と言うのは変ですから、「献げる」という言い方になるでしょう)。

アブラムはどうしてそんなにも莫大なささげ物をする事ができたのでしょうか。

それは明らかに彼が神から祝福を受けたからです。

神がアブラムを祝福してくださったからです。

「いと高き神、天と地を造られた方」が自分を祝福してくださったと知ったからです。

アブラムはそれより前に神から祝福の約束を受けており、神の恵みを知っていました。

それでそれまでも彼は主のための祭壇を築いたり、主の御名を呼び求めたりしてしまし

た(12:7,8。13:4,18)。

それに加えて、このたび「いと高き神、天と地を造られた方」が自分を祝福してくださったことを「サレムの王」また「いと高き神の祭司」である「メルキゼデク」を通してアブラムは改めて知ったのです。

神はこれまでもアブラムに非常に多くの財産を豊かに与えて恵み、祝福してくださっていましたが、このたびは強大なケドルラオメル王たちの大軍を自分の「手に渡」して勝利を与えてくださいました。

そんな名声も、今持っている財産も、すべては 100 % 「いと高き神、天と地を造られた方」主の恵み、祝福のおかげなのだ、とメルキゼデクの言葉を通してアブラムはますます良く知ったのです。

そのことは続く彼とソドムの王とのやりとりからもわかります。

「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」と言うソドムの王に対してアブラムは答えました。

「私は、いと高き神、天と地を造られた方、主に誓う。糸一本、履き物のひも一本さえ、私はあなたの所有物から何一つ取らない。それは、『アブラムを富ませたのは、この私だ』とあなたが言わないようにするためだ。」と。

「アブラムを富ませたのは」ソドムの王では断じてなく、「いと高き神、天と地を造られた方、主」です。

アブラムの敵をアブラムの手へ渡し、勝利を与えてくださったのもソドムの王では断じてなく、「いと高き神、天と地を造られた方、主」です。

故にただ「いと高き神に誉れあれ。」(14:20)なのです。

メルキゼデクと共にアブラムもそういう神への感謝と喜びをもって告白し、神に栄光を帰したのです。

アブラムはただ口だけで神を讃美し神に栄光を帰し、感謝と喜びを、信仰を告白したのではありませんでした。

彼は実に具体的に、現実的に「すべての物の十分の一」を神に献げたのです。

この「すべての物の十分の一」という基準は一先にも言ったようにアブラムが自分で決めたいわば自主的なものでした。

どこからそんな思いが生まれたのか、考えてみれば不思議なことです。

それは神から来たと考えるほかありません。

後に「地の十分の一は、地の産物であれ木の実であれ、すべて主のものである。それは主の聖なるものである。」(レビ 27:30)と言われる神です。

その神が「すべての物の十分の一」は「主の聖なるものである」という思いをアブラムにお与えになったと見るほかありません。

それでアブラムは“当然のこととして”喜んで感謝して「すべての物の十分の一」を神に「返し」たのです(20節の「与える」と21節の「返す」は同じ言葉です)。

『十分の一』は“献金”ではなく神に“当然返すべき返金”だ。献金とはそれ以外、それ以上の分だ。」という人がいますが、確かにそれは言えると思います。

このアブラムを恵み祝福してくださった神、「いと高き神、天と地を造られた方、主」が私たち一人一人をもお造りになり、この世に生まれさせ、「日ごとの糧」を今日も与え、その他私たちの必要のすべてをご存じで、ときに応じて与え、養い楽しませ喜ばせ生かしてくださっています。

何よりも私たちに主イエス・キリストをお与え下さり、またキリストにある罪の赦し、永遠のいのちを与えてくださり、すべての祝福を与えてくださっています。

私たちが神から受けている神の恵み、祝福は観念や御題目ではなく、実際の、現実的、具体的な事です。

ですから私たちもアブラムに倣って、現実的・具体的に私たちに恵み祝福して下さる神に、信仰によって、心からの喜びと感謝の告白を口で献げ、同時に現実的・具体的に「すべての物の十分の一」を—それは現代では実際的には「給料であれ、アルバイト代であれ、お小遣いであれ、年金であれ、遺産であれ、すべての収入の十分の一」となるでしょう—まず神にお献げするのです。

そしてそれができるのも、いや、させていただけのも、またひとえに神の恵み、祝福の故なのであります。

